

つきかけ

観劇の参考に資料をご用意いたしました。

劇前にお読みになっても作品を楽しんでいただくのに問題はございません。

ただ、一部作品の内容と関わっている部分もございます。

全く前情報なしでご覧になりたいお客様にはお勧めできません。

ご了承ください。

- ◆ 参考文献 ◆
- ◆ 関連年表 ◆
- ◆ 用語集 ◆
- ◆ 引用歌集 ◆

参考文献

『つきかけ』の執筆・構想に際し、以下の書籍を参考にいたしました。

作者・編者及び著作権保持者に心より厚く御礼を申し上げます。

北杜夫 『楡家の人びと』

『青年茂吉』

『壮年茂吉』

『茂吉彷徨』

『茂吉晩年』

『どくとるマンボウ青春記』

『どくとるマンボウ医局記』

『どくとるマンボウ昆虫記』

『どくとるマンボウ追想記』

『人間とマンボウ』

『母の影』

斎藤茂太 『茂吉の体臭』

『回想の父茂吉 母輝子』

『精神科医三代』

『快妻物語』

斎藤茂太・北杜夫 『この父にして一素顔の斎藤茂吉』

斎藤美智子 『「感謝」する人 茂吉、輝子、茂太に仕えたヨメの打ち明け話』

斎藤由香 『猛女とよばれた淑女—祖母・斎藤輝子の生き方』

佐藤佐太郎 『斎藤茂吉言行』

品田悦一 『斎藤茂吉 あかあかと一本の道とほりたり』

小泉博明 『斎藤茂吉の人間誌』

加藤淑子 『山口茂吉』

※順不同・敬称略

『つきかけ』における

斎藤茂吉関連年表

※今作『つきかけ』での年表でありフィクションです。

現実の斎藤家の人々とは違う個所もあります。

1882年（明治15年）5月

山形県南村山郡金瓶村に出生。本姓は守谷。

1895年（明治28年）

同郷で親戚の医師斎藤紀一の養子候補になる。上京し斎藤家に寄寓する。後の妻輝子は紀一の実子であり、これ以降同居の関係になる。

1898年（明治31年）

この頃より短歌を自己流で作るようになる。

1905年（明治38年）

正岡子規の遺稿『竹乃里歌』を読み、強い影響を受ける。同年、東京帝国大学医科大学に入学。

1906年（明治39年）

子規の弟子、伊藤左千夫の弟子になる。

1908年（明治41年）

子規派の雑誌『アララギ』創刊。茂吉も短歌を発表するようになる。

1910年（明治43年）

東京帝国大学医科大学卒業。

1913年（大正2年）5月

生母いく死去。連作『死にたまふ母』発表。

7月

伊藤左千夫死去。

10月

第一歌集『赤光』刊行。大きな反響を巻き起こす。

1914年（大正3年）

輝子と結婚。斎藤家の婿養子となる。

1916年（大正5年）

長男茂太出生。

1917年（大正6年）

長崎医学専門学校精神病科教授になり長崎へ転所。

1918年（大正7年）

次男宗吉出生。

1920年（大正9年）

長女百子出生。

1921年（大正10年）

精神病学研究のため欧州留学へ出発。

1924年（大正13年）12月

養父紀一の青山脳病院が火事で全焼。

1925年（大正14年）1月

留学より帰国。病院の再建に奔走。

1927年（昭和2年）

養父紀一が引退し、青山脳病院院長を継ぐ。

1928年（昭和3年）

紀一死去。家督は紀一の実子に譲るが、病院経営は全て茂吉が負うことになる。

1929年（昭和4年）

次女昌子出生。

1933年（昭和8年）

妻輝子の醜聞が報道される。夫妻別居。茂吉と子供はそのまま青山の自宅に残り、輝子は世田谷の実弟の自宅で母と同居。

1934年（昭和9年）

この年より医師としての診察は週一回程度になる。

1937年（昭和12年）

日中戦争の勃発以後、数多くの戦争の短歌を詠むようになる。

1944年（昭和19年）

茂太・宗吉応召。二人とも陸軍病院に。

1945年（昭和20年）3月

戦争の激化により妻輝子との別居を解消。

4月

故郷金瓶へ疎開。妹の嫁ぎ先の離れを借りる。

5月

東京大空襲で青山の自宅・病院全焼。

8月

敗戦。空襲後疎開していた妻輝子と次女昌子を東京に帰す。

1946年（昭和21年）

金瓶から同じ山形の大石田に移る。

1947年（昭和22年）

疎開生活を終え、輝子や茂太の購入した世田谷区代田の家に移る。

1948年（昭和23年）

大石田時代の歌を集めた『白き山』刊行。後期の傑作歌集とのちに評価される。

1950年（昭和25年）

新宿大京町に病院兼自宅を新築。10月の引っ越し直前に脳出血を発症する。

用語解説

※古川流の解釈です

※項目内の順番は登場順

人物

美智子 斎藤美智子。茂太の妻。

茂一・章二 茂太・美智子夫妻の子供。この夫妻の子供は、最終的には男男女女の四兄弟になる。

輝子の父親 精神科医斎藤紀一。優れた経営手腕で、一代にして大病院の主となった。また国会議員も一期務める。病院の消失を期に引退。婿養子茂吉に後を託す。

柴生田君・佐藤君 それぞれ茂吉の高弟の歌人、柴生田稔・佐藤佐太郎。山口茂吉を合わせて三高弟と言われる。

永井君 永井ふさ子。茂吉よりも28歳年下のアララギ会員。輝子と別居中の茂吉と、一時期恋愛関係にあったとも言われる。ただしその関係は、茂吉の死後、永井ふさ子が公表するまで公になっていなかった。

宮尾直哉 百子の夫。外科医であり、茂太とは同級生。

子規 正岡子規。茂吉の師匠伊藤左千夫の更に師匠にあたる。近代短歌・近代俳句の創始者とも言える歌人であり俳人。

誠二郎 守谷誠二郎。茂吉の甥。戦前は青山脳病院で事務局長をしたり、茂吉の秘書役をしていた。

宇田先生 精神科医宇田俊一。茂太の妻美智子の父親。

地名

大石田 山形県大石田町。茂吉は昭和21年から翌年にかけてここに疎開していた。

新宿大京町 新宿区の新宿御苑近くの住所。1950年に斎藤病院が完成し、斎藤家はここに移る。茂吉の終の棲家となる。

金瓶 山形県上山市金瓶。茂吉の生地であり、昭和20年から21年までここに疎開していた。

青山 渋谷区青山。東京大空襲まで青山脳病院という茂吉が院長を務めた病院が存在した。

松原 世田谷区松原。火事で焼失後、青山脳病院の本院が建設された。その後、戦争中に東京都に委譲される。

その他

お父様・お母様 斎藤家の丁寧な言葉遣いは、茂吉の妻輝子の通っていた学習院に由来する。幼児は両親のことをパパ様・ママ様と呼んでいた。

昭和8年の別居事件 ダンスホールの講師が、多くの上流階級の夫人との性的関係を持ったとされ逮捕された事件。スクヤンダルとして大きく報道された。斎藤茂吉夫人である輝子とその相手の一人であるとも報道された。

斎藤茂吉全集 物語の翌年、昭和26年から32年までかけて全56巻が岩波書店から刊行される。山口茂吉は全集の編集に献身的に携わった。

どさまわり 職業上の都合で地方勤務を続けることの俗称。ここでは慶應医学部教授の依頼で、宗吉が地方の病院に勤務していることを指す。

アララギ 正岡子規の歌論を信奉し短歌結社『アララギ』に拠った歌人たちをアララギ派と称する。伊藤左千夫、島木赤彦、斎藤茂吉が代表的な歌人である。

テーペー 肺結核の俗称。ドイツ語に由来する。

ストレプトマイシン 1943年アメリカで誕生した抗生物質。結核の治療に用いられた最初の抗生物質である。戦後数年は密輸品として日本にも輸入される。

DDT 1945年の敗戦後、米軍によって日本に持ち込まれた殺虫剤。シラミ駆除・防疫対策に広く用いられた。後に発がん性の高さや環境汚染物質であることが指摘される。

海外渡航の許可制 1945年の敗戦後、一般人の海外渡航は強い規制を受けていた。これが自由化したのは1964年のことである。

群像 1946年創刊の文芸月刊誌。現在まで続いている。

照洋丸 水産庁の漁業調査船。茂吉の次男斎藤宗吉が船医として勤務したことで知られる。実際の照洋丸は1956年竣工で、斎藤宗吉を乗せた航海は1958年のことである。作中の照洋丸の航海はフィクションである。

『つきかげ』引用歌集

作品中に出てくる斎藤茂吉の短歌を登場順に一覧にしております。
この場をお借りして改めて、作者斎藤茂吉氏に敬意と感謝の意を表します。

あかがねの色になりたるはげあたまかくの如くに生きのこりけり

うつそみの吾を救いてあはれあはれ十万円を貸すひとなきか

辛うじて机のまへにすわれども有りとしも無しこのうつしは

朦朧としたる意識を辛うじてたもちながらにわれ曉に臥す

罪惡のほろびむとする轟音にシンガポール落つシンガポール落つ

新宿の大京町といふとほりわが足よわり住みつかむとす

いつしかも日がしずみゆきうつせみのわれもおのずからきはまるらしも